

「文章表現演習」における学生の問題点とその改善について

佐藤尚子 吉野文 椎名紀久子

1 はじめに

千葉大学では、普遍教育の改革の一環として、「平成 17 年度普遍教育の改善に関する答申」^[1]で、普遍教育科目（必修科目）としてコミュニケーション・リテラシー科目を開設することが求められ、「普遍カリキュラムの改革について」^[2]では、2009 年度よりコミュニケーション・リテラシー科目を全学必修科目として開講すると述べられている。このような状況を受け、2007 年度はコミュニケーション・リテラシー科目のパイロット授業として 3 つの授業が教養展開科目として開講された。「文章表現演習」は開講されたパイロット授業の 1 つである。本稿では、「文章表現演習」で学生が持っている問題点について分析し、今後の授業をどのように改善したらよいかを考察する。

2 先行調査

コミュニケーション・リテラシー科目は、「学習・研究活動をする上で必要な日本語力の向上を目指す科目」と考えられている。この科目を開講するにあたり、学生の実態を知る予備調査が必要である。千葉大学の学生が「学習・研究活動をする上で必要な日本語力」について、学生がどのような意識を持っているかを調査するため、学部 1 年生に対してアンケート調査を実施した。

2.1 調査の方法

調査：学習・研究活動に必要な日本語力に関するアンケート

調査期間：2006 年 7 月 18 日～2006 年 7 月 31 日

対象者：学部 1 年生(2,482 名)。工学部 B コースを除く。留学生 27 名を含む。

回答方法：無記名

配布・回収方法：1 年次必修科目で配布。授業中に回収、または、指定場所に学生自身が投函。

回答者数：1,719 名。このうち少なくとも 24 名分は他学年のデータ。

回収率：69%

2.2 調査の結果

調査を行った 35 項目について、(1) (A)大学入学時に行っていた（できていた）項目と (C)大学の授業で指導を希望する項目がともに 50%以上の項目と (2) (A)が 50%未満で (C)

が 50%以上の項目を抽出した。(1)は「千葉大学入学前に行った(できている)が、大学でも指導が必要な項目」で、レディネス(既習能力)、ニーズの両方があると考えられ、(2)は「千葉大学入学までに行わなかった(できなかった)ので、大学で指導が必要な項目」で、ニーズがあると言えよう。

35項目のうち、文章作成に関する11項目、情報収集に関する4項目全てが、(1)と(2)であった。具体的な項目を表1にあげる。

表1 文章作成および情報収集に関しレディネスおよびニーズのある項目

(1) 千葉大学入学前に行った(できている)が、大学でも指導が必要な項目 文章表現：レポートを書くとき文体の統一に気をつける。 自分の意見と事実を分けて書く。 情報収集：あるテーマについてインターネットで情報収集する。
(2) 千葉大学入学までに行わなかった(できなかった)ので、大学で指導が必要な項目 文章表現：論拠を示しながら自分の意見を書く。 本や論文の内容を決められた字数で要約する。 本の内容や話の要点を箇条書きにする。 他者の文章を引用する時、それが引用であることを示して書く。 複雑な内容を説明する時は図示する。 レポートと感想文を区別して書き分ける。 文献で調べたことや実験で得たデータに基づいてレポートを書く。 表計算ソフトを使って表やグラフを作成する。 レポートを書くための文献リストを作成する。 情報収集：集めた情報を自分が利用しやすい形にする。 調査すべきことについて、アイデアが浮かんだ時は必ずメモを取る。 大学の図書館にない本の探し方を知っている。

3 研究の目的

先行調査に基づき、2007年度前期にパイロット授業として、「文章表現演習」を開講した。この授業で学生が直面した問題点のうち、本稿では、レポートや論文など論理的な文章で使用される日本語に対する問題点とレポートのテーマを選ぶ過程での問題点の2点について分析を行い、今後の授業の改善を目的とする。

4 方法

論理的な文章に使用される日本語に関する問題点については、毎回の授業の際、実施した授業アンケートと最終回に実施したアンケート調査の回答を分析対象とした。また、テーマを選ぶ過程での問題点については、学生が最初に出したテーマとその後の変化について分析した。

5 結論と考察

5.1 論理的な文章に使用される日本語の表現およびレポート・論文の構成について

結論

- 1) レポートや論文を書く際に使用される文体および語彙について意識化させる必要がある。
- 2) レポートや論文は自らの考えを論理的に不特定多数に伝えるものである。
そのため、文学作品が必要とするようなレトリックは必要なく、名文や美文を書かなければならないというような誤解を解く必要がある。
- 3) 日本語の文章は必ず起承転結で書くと思いこんでいる学生が多い。これは誤解であり、それを払拭する必要がある。起承転結は、本来、漢詩の句の配列法を示すものである。論理的な文章は論の一貫性が重要であるが、起承転結の「転」の部分は論の一貫性を犯すと考えられる。

「テストの答案に話し言葉がまざる」など、文章を書く際に、学生の使用する日本語に問題があることは明らかであったため、本授業では第2回目に「日本語の文体の整理（レポート、論文で使う文体について）」「話し言葉と書き言葉の書き分け」第4回目に「レポートの構成と起承転結」など、日本語についての知識の整理と文章の構成についての授業を実施した。

第2回目の冒頭に、レポートや論文で使用される文体について整理したところ、「でる」体で書くことを知らない学生が22名中6名いた。授業アンケートの今日の授業を受けて気づいたことを書く欄には、「だ体とである体の使い分け方」「特定の人へ向けてなのか、不特定多数の人に向けてなのかで文章の文体が変わること」「話し言葉を書き言葉が知らないうちにまざってしまっていること」などがあげられていた。学生は、まず、日本語の文章の産出にあたり、何となくではなく、目的に合わせて、文体、語彙を意識的に使う必要性があることを認識できたと考えられる。

岡本(2006)にもあるように、大学入学以前の学校教育で学習した文章の構成は「起承転結」が一般的である。つまり、「起承転結」しか学習していないため、日本語の文章は「起承転結」で書くと思いこんでいる。レポートや論文の構成を示した際には、授業アンケートの気づいたことを書く欄には「レポートには型があったということ」「論文は型が決まっているということ」を初めて知った」「起承転結にこだわる必要はない」などと書かれていた。また、従来の国語教育が文章を書くということを重視せず、伝統的には文学作品の鑑賞が重視される傾向にあったためであろうか、学生の中には文を書くときは名文・美文を書かなければならないと思っている学生もいる。気づきの欄には「論文には名文は必要ないということが分かり、安心した」「レポートには必要なことのみを書けばよいということ」という記述もあった。

以上、学生がもっている論理的な文章を書く際の日本語の問題点をあげたが、見方を変えれば、これは学生がレポートや論文に代表される大学で教育・研究活動を行うのに必要な文章のモデルをもっていないということである。今までは、授業を受け、研究書や論文を読み、レポートや発表のレジュメを書いているうちに、大学で必要な文章を自然習得し

ていたのだが、ほぼそれが白紙の学生に対し、文章作成の授業をする以上は、どのようなモデルを学生に示すのが適当であるかを検討する必要がある。

5.2 情報収集とテーマの設定・絞り込み

結論

- 1) 情報収集の段階で、どこでどのように情報を収集したらいいのか分からない学生が多い。情報収集の方法を丁寧に指導する必要がある。
- 2) 漠然としたテーマは設定できるが、具体的な問題点を絞り込むことが難しい。それぞれが持っている疑問と集めた情報を整理していく段階に時間をかける必要がある。
- 3) レポートのテーマは自由とした。その結果、ほとんどが異なったテーマを選んだ。個々の学生が持つ問題点、疑問をクラスで共有することができ、学生の視野が広がった。

本授業では、論証型のレポートを作成し、それを提出することを最終課題とした。作業は教科書として使用した『ピアで学ぶ大学生の日本語表現—プロセス重視のレポート作成—』(大島弥生他、2005 ひつじ書房；以下、教科書とする)にそって行った。本書はレポート作成を初めて体験する大学生を主な対象としており、また、東京海洋大学の教員を中心に作成されたもので、千葉大学の1年次に使用するのには適当であると判断し、採用した。

この教科書では、第2課でレポートのテーマを考え、第3課で構想を練り、情報を収集する作業を行う。

教科書にそって、まず、自分で興味がある、疑問と持っていることがらを選び、次に図書館へ行って、自分が選んだことがらに関連した文献を探し、どのような問題点があるかを調べながら、テーマを絞り込んでいくという基本的な作業を課したが、この作業がきちんとできた学生は少なかった。コンピュータで検索を行い、テーマに関連のあるホームページを探し出してくるだけだったり、テーマに関連のある文献を見つけ出したとしても、書誌情報を記してこなかったために、どこに書いてあるのかわからなくなってしまったり、問題点を洗い出す以前の情報収集の段階でつまづく学生がかなり見られた。この結果、テーマが絞れず、受講を取りやめた学生がかなりいた。

教科書では、第4課で集めた情報をもとにテーマを絞り込み、自分のレポートでは何を主張するかを目標規定文にまとめる作業をする。ここでいう目標規定文とは、次に示すものを骨格とする。

このレポートでは、X (特定の問題) について論じる。Y (Zと主張する根拠)

を考察し、Z (Xの問題に対する自分の主張) という結論を導く。^[3]

学生が提出した目標規定文と最終課題のレポートの題を表2にまとめた。

表2 学生が提出した「目標規定文」と最終課題のレポートの題

学生	目標規定文					最終課題のレポートの題	
	X	について論じる。	Y	を考察し、	Z		という結論を導く。
1	国連職員に欧米人が多いという問題を解決すること		日本が文化的、地域的に孤立していること		日本で国連に関する再教育、帰国後の受け皿の充実を図る		国連職員には欧米人が多いという問題を解決するにはどうしたらよいか
2	自転車に関する交通ルール(マナー)強化の必要性		ルール違反が起こる原因とそれがもたらす影響、現在の交通法		交通ルールを強化(厳しく)すべきである		信号無視をする人を減らすために個人レベルでできることはあるか
3	現段階で小学校で英語教育を導入すべきか		国際理解教育=英語教育の不自然さ、英語教育者の人数、私立中入試への影響、現在の小学校教育の実態、実際に英語理解を深める授業ができるのか(この中のどれか)		小学校英語教育は導入すべきではない		現段階で小学校に英語教育を導入すべきか
4	日本国憲法を改憲すべきかどうか		今の日本国憲法のあやふやさがもたらす国全体への悪影響		改憲すべきである		憲法第9条は会見すべきか
5	一般の人が救急の現場に居合わせたとき、どのようなことができるのか、救急救命士はどのようなことができるのか		早い救命処置により生存率が上昇すること、一般の人への救急知識の普及		多くの人は教養として救急の知識を身につけるべきである		応急措置を全ての学校で授業に取り入れるべきか
6	世界の貧困を消すために日本は資金の貸し付けを続けるべきか		日本に資金を貸し付けられた国に対する悪影響		日本は資金の貸し付けをやめるべきだ		世界の貧困をなくすために日本の資金貸し付けは必要か
7	食品の着色料は人体にどのような影響を与えるか		食品の着色料の歴史や成分など		着色料を使う製品は気をつけて食べるべきだ		着色料は人体にどのような影響を与えるか
8	年々増加するネットオークション、およびネットショッピングという情報社会で人々の生活の中で行われている流通に対しどのような対策が行われるべきであるか		ネットオークション、ショッピングの利点と危険性、また、現在とられている対応策		ネット内で信じられるのは自分だけであり、結果として自己管理、自己責任をしっかりとるべきである		ネットショッピング及びネットオークションの危険性による対策
9	公立学校の週休二日制は廃止すべきか		現在の日本の学力低下や非行の増加や休日の過ごし方		週休二日制は廃止すべきである		公立学校の週休2日制を廃止すべきか
10	日本の医師不足の現状を確認し、それを改善するために医学部の人数をどのように増やすべきか		医師数の国際比較、勤務時間、医学部入学等		医学部への入りやすさ、通うことに対する問題の改善をすべきである		日本の医師不足
11	犯罪への最も重い刑として、無期懲役は死刑より有効か		無期懲役刑囚に与えられている自由と、彼らを養っていくためにかかる費用(税金)		無期懲役は死刑より有効ではない		文学賞の増設は望ましいか
12	地球環境を守るため、人々は、ゴミを減らすためにどうすべきかということ		環境破壊が招く、地球生物への悪影響		人々は、今すぐにも使い捨てを廃止すべきだ		スーパーのレジ袋を有料化すべきか
13	ゴミを分別することの意味		ゴミ処理に関する過程、それにかかる費用、ゴミ問題		人々はもっとゴミ処理問題に関心を持ち、積極的に分別を行っていくべきである		(提出せず)
14	自己主張の必要性		どのような点で必要か、どのような点で必要ではないとされるか、またそれらの確証例、反証例		よりよい相互理解のために、基本的には自分の意見をはっきりと主張すべきである		(提出せず)
15	著作権を守ること		現在ある条約、法律		国際的にしっかりとった条約を作るべきである		(提出せず)

テーマ変更

テーマを絞った

目標規定文が提出できた学生は 15 名だった。また、最終課題のレポートについては、目標規定文とほぼ同じテーマで提出できた学生が 10 名、テーマを大幅に絞って具体的な内容に変更した学生が 1 名、テーマを変更した学生が 1 名、提出できなかった学生が 3 名だった。目標規定文と同じ内容でレポートが書けた学生は、情報収集の段階で有効な情報を得ることができ、自分が持っている疑問とその情報をうまくリンクさせ、それによって目標規定文が書けた学生である。一方、テーマを変えたり、提出できなかった学生は、きちんとした情報収集をせず、目標規定文を提出する期限が来てしまったため、自分が問題意識を持っていることがらの中から適当に書いて出してしまった学生である。学生 11 は目標規定文を出しているにもかかわらず、「データがないんです」と相談に来た。学生 12 と 13 はともに環境問題、ゴミ問題を扱っている。学生 12 は、その後、スーパーのレジ袋という具体的な問題にテーマを絞り込むことができたので、レポートを書くことができたが、学生 13 は総論的なレベルから具体的な問題へ切り込むことができなかった。情報収集を怠り、頭の中だけで考えていたからではないかと思われる。

多くの学生がつまづいた情報収集の方法について、より丁寧に指導する必要がある。その 1 つの方法として、東谷 (2007) に取り上げられている「パスファインダーバンク」^[4] を利用してみたい。どのようなところから情報を集めたらいいかが、具体的に示され、集めた情報をまとめる雛型も用意されている。また、すでに登録されているパスファインダーを使えば、効率的に情報集めができるからである。

そして、自分が持っている疑問と集めた情報を整理していく段階に時間をかける必要がある。

この論証型のレポートを最終課題とする際に、テーマをある分野に限る、または、教員が指定したテーマにするか、全くの自由にするかを検討した。今回はパイロット授業ということでテーマは自由になることになった。表 2 にあるように、ほとんどが異なったテーマを選んだ。クラスで目標規定文を表 (無記名) にして配布したところ、「他の学生がどんなことを考えているがわかって、よかった」という声があった。それぞれがどのようなことに問題意識を持っているかがクラスで共有でき、自由にすることは成果があった。

6 まとめと展望

今回はパイロット授業ということで、2006 年度に実施した調査の結果をもとに授業内容を考え、また、レポート作成に対する指導が先行している大学の作成した教科書を使い、千葉大学の学生にとってどのような点に困難があり、指導が必要なのかを考えながら、授業を行った。

大学では、「未知のものを知ろうとすること」「すでに知っているものに疑問を持つこと」である「問う」^[6] ということが日常的に行われており、教員にとっては習慣となっている行為である。また、教員は大学で必要な文章のモデルを自然習得してしまっている。一方、入学したばかりの学生にとって大学で必要な「問う」という行為は非日常的な行為である。また、大学で必要な文章のモデルを持っていないため、どのようなものを書いて

いいのか具体的にイメージができない。教員は、まず、このようなギャップがあることを認識することが重要であろう。

そして、「問う」という意識を持ち、それを支える有効な情報の収集ができ、一方で、どのような文章を書けばいいかというモデルを持ち得たとき、かなり、形の整った、ある程度内容のあるレポートが書けるようになるのである。

来年度は、情報収集の方法について詳しく行い、テーマの絞り込みに際して、収集した情報を有効に利用できるように指導したいと考えている。

注

- [1] 「平成 17 年度普遍教育の改善に関する答申」 普遍教育センター（仮称）設置準備委員会（2006 年 2 月）による。
- [2] 「普遍カリキュラムの改革について」 普遍教育センター企画部会（2006 年 6 月）による。
- [3] 大島弥生他(2005) pp.39
- [4] パスファインダーバンク

http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kikaku/pfb/pfb_frameset.htm

千葉大学附属図書館のホームページにもパスファインダーがある。これはある科目を受講するにあたり必要な参考図書や関連図書を一覧表にまとめたものである。

- [5] 本授業では、学部への偏りがないように受講学生を選んだ。テーマがほとんど重ならなかったのは学生の専門や興味の偏りが少ないことに起因するのかもしれない。4月に選抜した受講学生の内訳は、文学部・看護学部各2名、教育学部・法経学部・理学部・薬学部各3名、工学部9名、計25名である。このうち、3名は登録せず、授業は22名で始まった。
- [6] 東谷(2007) pp.16

引用文献・参考文献

- 大島弥生他(2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現－プロセス重視のレポート作成－』ひつじ書房
- 岡本能里子(2006)「日本語談話構成能力育成のための基礎調査－規範と実態の模索を通して－」『大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：統合・協働的アプローチ』（平成15～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、課題番号15320065、研究代表者：大島弥生）
- 千葉大学言語教育センター日本語部門(2007)『千葉大学における学生のコミュニケーション・リテラシーの養成に向けて－2006年度版－』
- 東谷 護(2007)『大学での学び方 「思考」のレッスン』勁草書房
- 戸田山和久(2002)『論文の教室』NHKブックス
- 二通信子他(2003)『留学生のための論理的な文章の書き方 改訂版』スリーエーネットワーク
- 藤田哲也編著(2006)『大学基礎講座 改増版』北大路書房